フランシスコ会案内

小さき兄弟会創立８００周年と日本
フランシスコ会の養成プロセス

２０１０年

小さき兄弟会創立八〇〇周年と日本

現代では、「平和の使徒」と呼ばれ、教皇ヨハネ・パウロ二世によって「自然環境保全のために働く人々の保護者」ともされて広く世界に知られている聖フランシスコは、一一八一年にイタリアのウンブリア地方にあるアシジという小さな町に生まれました。二〇〇九年は、そのフランシスコが、一二〇九年に教皇イノセント三世より承認を受けて創立した「小さき兄弟会」（ＯＦＭ）の修道会創立八〇〇周年に当たります。

一二〇九年、フランシスコはこの福音の精神に生きようとする同志十一名と共にローマに赴き、時の教皇イノセント三世から「小さき兄弟の修道会」(ＯＦＭ)の最初の会則の認可を口答で与えられました。その結果、定住して大修道院で生活を送るベネデイクト会の会則とは異なる修道会則に従い、従順・清貧・貞潔に生きることによって宣教する独特な修道会（托鉢修道会）が生まれたのです。その修道生活に関する思想は「会則」によく現れています。その後、兄弟たちの数は急激に増加し、ヨーロッパ各地に広がって行きました。そして一二一二年にはクララを中心に「貧しい姉妹たちの会」（第二会）が誕生し、一二二一年には在俗の「償いの兄弟姉妹の会」（第三会）の会則が承認されました。

当時は、キリスト教の内部の組織的・思想的混乱の最中にあり、教会のあり方に対する批判も台頭していたため、多くの信仰復活の運動がローマによって弾圧されていた時代でした。そのような歴史的背景の中で、教会に恭順を誓ったフランシスコ会が特別に教皇から承認されて発展した結果、それに倣ってその他の修道会が次々に誕生していきました。

清貧の追及者フランシスコ

フランシスコの幼年時代は、裕福な織物商の子としてなに不自由のない恵まれた日々を過ごし、青年時代にはウンブリアの高原の自然の中で、友人達とのびのびと自由な人生の春を謳歌していたようです。そしてその時代の若者たちがそうであったように、理想の姫君に仕える騎士を夢見、当時のアシジとペルージアとの市民戦闘に参加したフランシスコは、人質としてペルージアで囚われの身となり、病気をも体験することになります。

ある伝記には、彼は父からの保釈金でやっとアシジに帰還することになるが、保釈金を支払うことのできない彼の多くの友人を想い、フランシスコはきっと心が痛んだことだろう、と記されています。その体験が、貧しさと富、金銭とは何かという問いにつながっていった可能性もあったに違いありません。その後のフランシスコは、財産を全て放棄し、身一つで家を出て自分の人生の道を探り求め、神に祈ります。そして一二〇六年、サン・ダミアーノ教会の十字架から「私の壊れかけた家を建て直しなさい」との声を聞き、単純素朴にまず教会の建物の修復から始めました。伝記作者によれば、この修築された聖堂で一二〇八年二月の聖マチアの祝日のミサにあずかっていた時、フランシスコは召命について照らしを受けた、と言われています。それは、弟子達を宣教に派遣するにあたって言ったキリストの言葉を記している福音の言葉でした。「行く先々で、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。帯の中に金貨も銀貨も入れていってはならない。旅行袋も持つな。重ね着もせず、

履物もはかず、杖も持ってはならない。町、・・・村、・・・家に入ったら、平安を祈りなさい」。この福音の朗読を聞いた時、彼は自分の歩むべき道を主が明らかしてくれた、と感じました。またハンセン病患者との出会いによって「自我からも解放された心境」に生きる彼の姿に惹かれた二人の友が、彼と行動を共にするようになりました。そして三人が財産についての問題を語り合った時、神のみ旨を知るために教会へ行き、当てもなく三度ミサ典書を開きました。最初に開いた時に見た言葉は、「もし完全になりたいなら、あなたの持ち物を売り、貧しい人々に施しなさい」：二度目は、「旅のために何も携えではならない」：三度目は、「私の後に従いたいと望む者は、己を捨て、自分の十字架を担って私に従いなさい」：という言葉でした。これが、フランシスコと最初の兄弟たちの出発点でした。

フランシスコの残した会則と遺言によれば、清貧の追求の出発点は、家もなく施しに頼って歩かれたキリストの生き方に倣うことでした。彼にとってキリストは、人間に対する神の愛の顕現そのものでした。ですから、そのキリストの愛の呼びかけに応えようとする心が、清貧を追求する生き方の根底にあったのです。そのキリストが、生涯を賭けて説いた教えが纏められている『山上の説教』という聖書の中に、あの時代だけではなく、現代社会にも「価値観の大転換」を呼びかけている言葉があります。その『山上の垂訓』の冒頭に繰り返される「幸いなるかな」というギリシャ語原文の言葉は、未来の希望を漠然と予言している曖昧なものではなく、今既にその幸いな現実の中に立っている人に対する感嘆文なのです。

キリストは、人間が真の幸せを追及して行く時、物質的価値だけに執着している間は、常に何か心が満たされない思いを体験することを指摘し、その満たされない思いが「心の幸せの欠乏」である、ということに気付くように警告します。例えば、『山上の説教』の冒頭の「幸いなるかな　心の貧しい人」と訳されている言葉は、旧約聖書の原語の意味では、現実の生活において貧しい人、虐げられている人、弱者でありながら柔和で謙虚な人の生きる姿勢を意味しています。当時の金持ちや権力者達が、傲慢になり、自分だけが全てになっている中で信仰のある貧しい人は、自分の無力さを体験し、全てを神に委ねて生きる心を深めていきました。しかし、自分自身の貧しさを知らない権力者達は、不幸なのだとキリストは言っているのです。ですから、「自分の貧しさを知るものは幸い」と訳した方が良いように思います。

キリストは、現代の私達にも、自分の富だけを追求する物質主義的価値観の大転換を呼びかけているのです。それは人間にとって「本当の幸せとは何か」、という問いかけだとも言えるでしょう。フランシスコ会は清貧の生き方を通して、人間の真の幸せを再確認し、人々にもそのキリストの呼びかけを証ししようとする兄弟会なのです。

兄弟的愛に生きる共同体

フランシスコ会の正式な名称は「小さき兄弟会」（Ｏｒｄｏ　Ｆｒａｔｒｕｍ　Ｍｉｎｏｒｕｍ）と言います。貧しさを追求する「小さき」という言葉は、「兄弟会」の「形容詞」です。貧しい生活様式の核心にあるのは、「兄弟的愛の交わり」なのです。それもまた、キリストの「神を愛し、隣人を自分のように愛しなさい」と言ったキリストに倣って生きようとするフランシスコの心でした。ですから彼は、

神の無限の愛そのものの顕現であるキリストの誕生を感謝するために、飼い葉桶の中の幼子を再現してクリスマスを祝うのが常でした。

勅書によって裁可されていない会則(一二二一年)の序文は、「これは・・・イエス・キリストの福音の生活である」という書き出しで始まっています。これは「戒律や規則」というよりも、フランシスコが兄弟たちと始めた共同体の生きた姿の描写なのです。兄弟たちが生活において出会うすべての人々に小さな者として仕え、兄弟的交わりを深めていくことを、フランシスコは心から望んでいたのです。そしてそれは、その共同体の住居、仕事、そして社会的・経済的事柄に関わるすべての生活に及びます。その関わりを通して、兄弟たちは共同体の周囲の人々との交わり、その人々と共に生きるという福音宣教の新しい生活形態と社会的運動を生み出していきました。それはフランシスコにとって、「私は仕えられるためではなく、仕えるために来た」と言うキリストに倣う愛の奉仕の精神でした。したがってフランシスカン的宣教は、兄弟たちに呼びかけ、他の人々のために生きる者となったキリストへの信仰告白を意味しているのです。

フランシスコが兄弟たちに勧めた兄弟的愛は、積極的で具体的なものでした。兄弟たちが断食の大斎の勤めをしていた或る日、兄弟の一人が空腹に耐え兼ねて思わず弱音を吐いた時、フランシスコは直ぐ傍に寄り、「私と一緒に食べましょう」と声をかけた、というエピソードが伝えられています。そのエピソードを裏付けるように、会則の中に、「私たちは、母親のように兄弟たちが食べ、住むために必要なものを見出せるように手助けしなければならない」という言葉があります。

しかもこの兄弟愛は、過度に理想化されたものではなく、多くの場合忍耐と互

いに支え合うこと（特に病人に対して）から始まり、更に兄弟たちが出会ったとき、互いに認め合い、お互いの関係を深め、喜びを分かち合い、お互いに敬い合う、と言った非常に具体的なものでした。そして、それらの兄弟愛は、共通の源泉であるキリストご自身への愛から湧き出るものでなければならない、とフランシスコは言っています。そのような共同体の生き方は、とりもなおさず神の愛、キリストの愛の証しとなり、福音宣教となるのです。

普遍性の人フランシスコ　―自然環境保全のために働く人々の保護者―

フランシスコの育ったアシジは、ウンブリアの高原に抱かれ、自然と一つに溶け合った緑豊かな町です。糸杉は天を仰ぎ、松風は歌い、葡萄畑は神の恵みの実りをつけ、神の現存に満たされた大気。これがフランシスコの育った土地でした。

フランシスコは、これまで世界の歴史に登場した人物の中で、最も「普遍性に富んだ人物」であると言われています。そのフランシスコの普遍性は、全ての存在を包んでいると同時に、一人一人の心にも内在する神の愛から流れ出ています。

フランシスコにとっては、異教の人々の心の中にもキリスト教が信じている同じ神がいました。永遠の愛そのものである神の似姿としてその存在を贈られた一人一人の人間を例外なく愛したフランシスコは、イスラム教徒との交流を求め、スルタン王を訪問しています。当時の世界では全く考えられない行動でした。しかしスルタンはフランシスコの人柄に心惹かれ、尊敬をもって兄弟たちをもてなしたという史実が伝えられています。キリスト教の宣教の歴史の中で、サラセン人を訪問した時のフランシスコのように異教の人々と友好的に語り合った人物は、他にはいませんでした。この姿勢は、第二バチカ

ン公会議において宣言された他宗教との対話の先取りだと言えます。現代では、世界宗教者会議を開催するための会議場として、フランシスコの生地であるアシジが選ばれました。日本からも仏教界の代表者たちが出席したのもうなずける出来事でした。

フランシスコの世界を包む神への愛の普遍的精神をよく表しているのは、ルネッサンスの先駆者ジョットのフレスコ壁画「小鳥に説教するフランシスコ」と、全ての世界を神の被造物として「兄弟姉妹」と呼んだフランシスコが作った有名な「太陽の賛歌」です。そこでは太陽・月・風・水・火・空気・大地を「兄弟姉妹」として神の愛への賛美に参加させ、はては死までも「姉妹なる死」として迎えたのです。こうしたことから、彼は西洋人には珍しいほど自然と一体化した聖人として、文化や宗教を超えて現代においても世界中の人から愛されているのです。

神の被造物である世界の全ての存在を兄弟姉妹と呼び、自然界と一つになっているフランシスコ、そして人間性の内的根底の方向に超越し、すべての人間を内側から包み込んでいる心の中の神との出会いを通して、すべての人々と一つになっているフランシスコ。これがフランシスコのたぐいまれなる普遍的人間性を形成しているのです。

この普遍性の人フランシスコは、ヨハネ・パウロ二世によって「自然環境保全のために働く人々の保護者」とされ、現代のフランシスコ会は「貧しい人々との連帯」と共に、「自然環境への畏敬（エコロジー）」という宣教方針を打ち出しています。

日本におけるフランシスコ会

日本の歴史の中にフランシスコ会という名が初めて登場したのは、いわゆる切支丹の時代で、日本二六聖殉教者の一人・ペトロ・バプテイスタとその同志たちが知られています。しかしその直後、日本の国策によりキリシタン禁制と迫害国の時代に入りました。そして、明治維新後に再びフランシスコ会が来日したのは、二十世紀はじめ一九〇七年でした。当時の日本においては、ドイツのフルダ管区とカナダのモントリオール管区から派遣された兄弟たちが初めに北海道で、次いで鹿児島で宣教活動を始めました。

ところが第二次世界大戦直後の一九四八年頃から、中国の共産政権確立に伴い、イタリア・スペイン・フランス・アメリカなどの諸管区に所属するフランシスコ会員達が国外に追放され、日本へ転任して来ました。これらの兄弟たちはそれぞれの母管区を説得し、日本の司教達と契約をして、自分達の宣教地区を持つようになりました。一九五六年頃には合計十二の地区においてフランシスコ会が独自に宣教活動をするようになりました。しかし、一九七七年に日本のフランシスコ会は一つに統合されて「日本聖殉教者管区」となりました。

そのような歴史を経て、新しい会憲と総則に基づき、母院・支院・分院の形態を取る「兄弟共同体」の体制が確立されてきました。支院までは教会法上の法人格が与えられています。幸いなことに、それと共に、社会の価値観の改革や貧しい人々、疎外された人々との連帯も大切な福音宣教として認識されるようになり、管区の財政も一本化されました。このような管区全体の一致の体制を踏まえ、現在の日本管区は、本来のフランシスカン共同体のあり方である「派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体」

（Ｆｒａｔｅｒｎｉｔｙ・ｉｎ・Ｍｉｓｓｉｏｎ[ＦＩＭ]）の実現を目指し、より深い霊性と共同体造りのため、精力的に取り組んでいます。

日本におけるフランシスコ会の証の役割

二〇〇一年,メキシコのガダルハラで開かれたフランシスコ会総評議会で、「派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体」の生き方が、強く打ち出されました。その共同体が日本の社会に証しする具体例は、その根底において「兄弟性」で結ばれています。

（１）兄弟的生活形態を目指す共同体作り：

その共同体の具体的例としては、「介護を必要とする高齢者や病気の兄弟と共に生きる共同体」があります。その兄弟性に結ばれた生き方が、現代社会の家族のあり方に証しとなれることを願っています。

そして、一人暮らしを余儀なくされている小教区担当の会員も、近い将来には共同体に属し、そこから「福音宣教」の場に出勤する方向を目指しています。また、「養成の場」（修道者として・司祭として）の共同体も不可欠な例です。

（２）清貧の証しの場としての共同体：

「小さき兄弟会」として、特に清貧に生きる共同体を目指すのは当然のことです。法的には、個人的には

勿論一共同体としての所有権を持たず、常に清貧を意識していく生活を通して、フランシスコの清貧の生き方を証しすることによって、現代の日本の経済至上主義からの転換を呼びかけると共に、貧しい人々との連帯の絆をも深めて行く方向です。日本が高度経済成長期に入り、大量生産が大量消費のサイクルに巻き込まれ、それが自然環境保護の必要性にやっと気づき始めた現代、フランシスコ会の清貧の証しの場としての共同体作りは、大きな意味を持っている現代です。

特に現代の貧困層の格差社会に見られる「ワーキング・プア」や「ホームレス」そして「生活保護」システムの崩壊の危機にさらされている人々と、どのように関わっていけるのかが、これからの日本のフランシスコ会にとって、重要なチャレンジになっていくと思います。終戦直後の日本の貧しい社会を支えた団塊世代の時代とは異なる現代の社会構造の中で、「小さき兄弟会」が関わることが出来る方向性を模索していかなえればなりません。経済開発のみでは、グローバリゼーションがもたらしたこの世界的な格差社会に苦しむ人々を救う解決とはならないからです。

（3）エコロジーの証し手としての共同体：

世界と自然を、同じ被造物として兄弟姉妹と呼ぶフランシスコの精神を、広く日本の社会にも浸透させ、日本におけるエコロジーの自覚を深めて行くことが出来るような共同体造りを通して、人々に呼びかけていくこと。第二次世界大戦後，エコノミック・アニマルと批判された日本人が、経済至上主義から脱皮して精神的豊かさを回復するためにも、社会的生活環境問題としてのエコロジーの分野においても、フランシスカン

的カリスマは大切な役割を果たしていく可能性が十分あると思われます。

（4）日本の文化（文学・宗教他）との交流を場としての共同体：

アシジのフランシスコは、特に日本の文学者や思想家達によって取り上げられて、広く人々に親しまれています。有島武郎・黒田正利・安部次郎・倉田百三・堀米庸三・西谷啓治・西田幾多郎など、そうそうたる枚挙に暇がないほどです。最近では、下村寅太郎の『アシシの聖フランシス』や中野孝次の『清貧の思想』（草思社）が、よく知られているようです。これら日本人の文学者や思想家そして仏教の僧侶達もが、フランシスコという人物に親しみを感じているのは、物質的富への執着を捨てたフランシスコの「我欲と自我からの離脱」の「悟り」に魅力を感じているからのようです。ここには、宗教界の交流への道も開かれています。

平和の使徒フランシスコ

中野孝次によれば、このあらゆる事柄からの「離脱」の精神には、死に定められた人間の死の恐れからの「離脱」も含まれ、「今を生きる」という悟りに通じています。このような仏教的・日本人的な「清貧による悟り」は、哲学者・下村寅太郎にも共通しています。しかし、このような日本人の悟りの心は、仏教的影響のためか、どちらかと言えばスタティック（静的）な心境のように感じます。それに対してフランシスコの悟りは、同じ「今を生きる悟り」にしても、もっとダイナミック（動的）な生き方に繋がっています。「誰も神のようには愛せない。私達はそれにならうように努力すべきだ。今までのとこ

ろ、私達はまだ何もしていない。だからこれから始めよう」。フランシスコの清貧の精神の根底には、神の愛の顕現そのものであるキリストのアガペの愛（相手を思いやる愛）があり、更には自然環境の畏敬の出発点である「神の愛の証し」という「信仰」が秘められているのです。

明治維新（一八六八年）直後、西洋文化と共に科学至上主義や唯物論的思想が、どっと日本に輸入された影響もあって、情的・直感的には非常に宗教的感性が豊かな日本人も、理性的次元では唯物論的・無神論的傾向が常識となっています。そんな社会環境にあって、人間に対する神の愛という出発点に立って「世界平和」と願うフランシスコについての精神の証しは、日本の社会は勿論世界に向って最も急を要するフランシスコ会としての証しだと言えます。

そのフランシスコのダイナミックな精神を良く表しているものに、世界にも知られている「平和を求める祈り」があります。これはフランシスコ自身の作ではなく、二〇世紀初めにフランスで作られた祈りですが、この平和の祈りは聖フランシスコの精神をよく伝える祈りであるとされ、多くの人に愛唱されています。

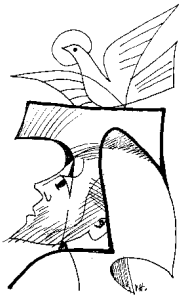
（神よ）私をあなたの平和の道具としてお使い下さい。憎しみのある所に愛を、いさかいのある所に赦しを、分裂のある所に一致を、疑惑のある所に信仰を、誤っている所に真理を、絶望のある所に希望を、闇に光を、悲しみのある所に喜びをもたらすものとしてください。慰められるよりは慰めることを、理解されるよりは理解することを、愛されるよりは愛することを、私が求めます

ように。

この精神は、キリストが生涯を通して教えている「相手を思うアガペの愛」そのものです。私がパキスタンのカラチにあるフランシスコ会の修道院を訪問した時、その廊下の片隅のゴミ箱に「ＵｓｅＭｅ（私を使って）！」という張り紙をしてあったのを思い出します。自我を空っぽにして初めて言える言葉。私は思わず感動し、その言葉を書いた人の人柄を偲びました。

アンドレア福田勤ＯＦＭ

初出：「家庭の友」二〇〇九年一〇月号



フランシスコ会の養成プロセス

アスピラント期（半年～１年）

入会を希望しながら自宅において、兄弟たちや各地の共同体とコンタクトを保ち修道召命の識別を生活の中で続けてゆく時期です。「静修の集い」、「赤倉山荘（妙高高原）青年の集い」などに参加して準備します。

志願期（１－２年）

志願院では、聖フランシスコの行き方に倣うフランシスカン（小さき兄弟）としての生活の基礎を、共同生活（兄弟たちとの生活）を通じて学んでいきます。フランシスカンへの第一歩はここから始まります。この期間は、日本各地の兄弟との出会いを通じて自らの召命を深める時期でもあります（田園調布修道院）。

志願者受入

修練期（１年）

志願院を経た兄弟は外部との接触を控え、自らの召命をさらに深める静かなときを迎えます。修練院（さいたま修道院）で着衣し、沈黙のうちに祈りと手仕事を中心とした生活を送り、フランシスカンとしての生き方を深め、神と人々の前で、修道誓願（従順・清貧・貞潔）を宣立する準備をします。

修練期着衣式

有期誓願期（３－６年）

修練期の終わりに初誓願を宣立した兄弟は、一年ごとに誓願を更新してゆく有期誓願期を過ごします（田園調布修道院）。この時期に兄弟たちは、フランシスカンとしての生き方を祈りと勉学を通して模索しつつさらに深め、本当に自分はこの道に生涯を捧げるのか、と自由意志による決断のもとに荘厳誓願（終生誓願）を宣立する準備をします。

初誓願

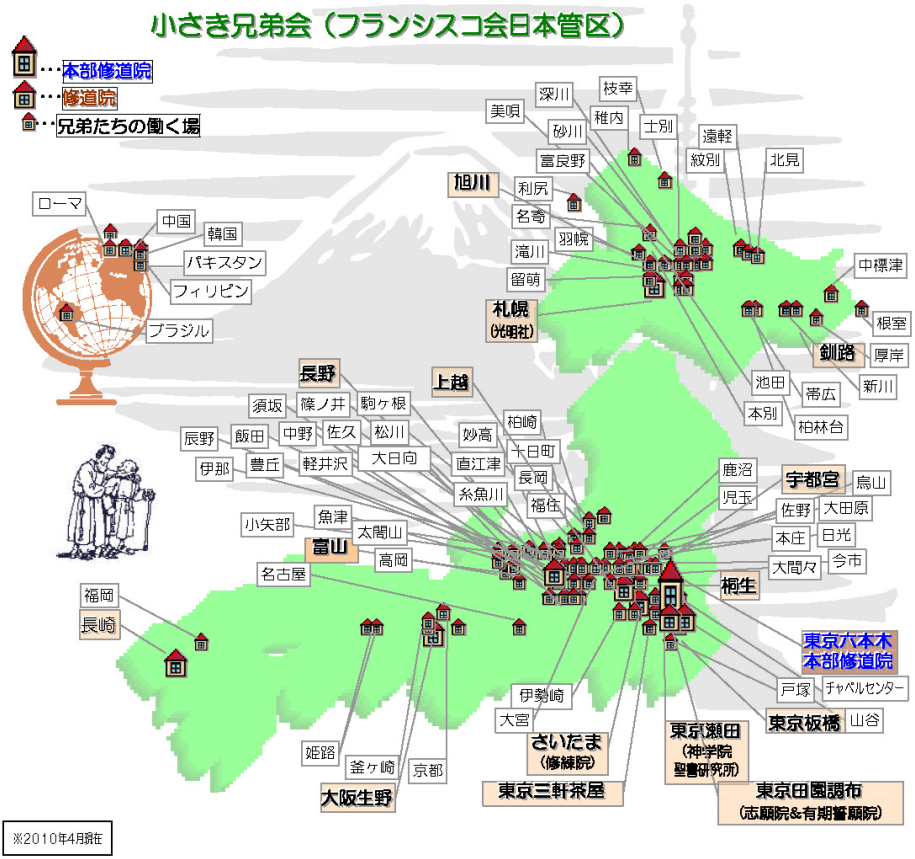
終生誓願

生涯養成期

荘厳誓願を宣立した兄弟は、キリストの福音を証しすべく、神から与えられた「小さき兄弟」としての召命を、その生涯にわたり自ら問いかけ、深めて生きてゆきます。派遣されるそれぞれの共同体で、司祭職の召命を受けたものはその準備と奉仕を、他の使徒職で奉仕する兄弟はさらに学び続け、それぞれのカリスマを生かしながら神から与えられた召命に忠実に従い各地で働きます。

司祭叙階

各地で働く兄弟たち



※2010年4月現在

フランシスコ会案内
小さき兄弟会創立八〇〇周年と日本
フランシスコ会の養成プロセス

発行者：フランシスコ会日本管区
発行年２０１０年５月３１日
東京都港区六本木４-２-３９
電話：０３・３０４３・８０８８
ウェブ：http://www.ofm-j.or.jp/
メール：ask@ofm.jp